

陳舜臣さんを語る会通信

NO.2 Mar. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年3月20日

通信第2号では、陳舜臣著『中国傑物伝』を取り上げました。『中国傑物伝』に収録された諸篇は、中央公論社から出されていた雑誌『Will』（1990年1月号～91年5月号。91年2月号は休載）に、16回連載されたものですが、どのような基準で16人が選ばれたのでしょうか。浅学の私が言うのはおかしいですが、漢の宣帝、張説、馮道、劉基など、とても、第一級の知名度とは言い難い人物です。陳舜臣さんは、文庫本の「あとがき」で、「好みに従ったと答えるほかない」とおっしゃっています。

まず、16人を紹介いたします。

（編集委員 橘 雄三）



陳舜臣『中国傑物伝』 登場人物16人を紹介します

	人物名	時代	略記
第一話	范蠡 はんれい	春秋時代	越王句踐の功臣。のち野に下り巨万の富を得る。陶朱公
第二話	子貢 しこう	春秋時代	孔門十哲の一。衛の人。孔子より31歳若いという
第三話	呂不韋 りよふい	～前235	秦の丞相。始皇帝の父ともいう
第四話	張良 ちょうりょう	～前168	劉邦の謀臣、前漢創始の功臣
第五話	漢の宣帝 せんてい	前91～前49	前漢第9代皇帝。前漢賢帝の一人に数えられる
第六話	曹操 そうそう	155～220	三国魏の始祖、字は孟徳。その子、丕が魏を建国
第七話	苻堅 ふけん	338～385	五胡十六国の一、前秦第3代皇帝。華北を平定
第八話	張説 ちょうえつ	667～730	則天武后の人材登用策が道を開いた。3度宰相に就く
第九話	馮道 ふどう	882～954	五代十国の5朝11帝に宰相として仕えた
第十話	王安石 おうあんせき	1021～1086	北宋、神宗の信任を得て宰相となり新法を実施
第十一話	耶律楚材 やりつそざい	1190～1244	モンゴル帝国の政治家。遼の王族出身
第十二話	劉基 りゅうき	1311～1375	元末明初。明建国、元勲の一人
第十三話	鄭和 ていわ	1371～1434頃	明、永楽朝期、大船隊を率い南洋・インド方面に遠征
第十四話	順治帝 じゅんちてい	1638～1661	清朝第3代皇帝。都を北京に遷した
第十五話	左宗棠 さそうとう	1812～1885	曾國藩の下で太平天国を平定。のち、洋務運動を推進
第十六話	黃興 こうこう	1874～1916	孫文らと中国同盟会を結成。辛亥革命を推進

《文庫本「あとがき」の続き》

陳舜臣さんは、同じく「あとがき」で、こうもおっしゃっています。

「傑物とは、彼にとって幸せならざる時代に生まれあわせた宿命的人物といってよい。よく歴史上のすぐれた人物に学べ、といわれるが、正直なところ、私は彼らに学ばねばなくなるのはご免蒙りたい。

私は読者の皆さんに、ここに登場した十六人の傑物がほかの生き方ができなかったのだろうか、と思いながら読んでいただきたい。なぜなら作者はそう思いながら書いたのだから。」

前述、陳舜臣さんの「好み」とは何なのか？それを考えてみるのも面白い。

そのキーの一つは民族主義の超克であり、コスモポリタニズムであると思います。

陳舜臣さんは、第七話の苻堅を「氏族の自己中心的な民族主義を厳しく戒めた理想主義者」として描き、また、耶律楚材を「私たちに民族・宗教・文化の違いを超え未来への進路を指し示してくれるきらめく星」と表現しています。

陳舜臣さんの「好み」とは何なのか？これについては、井波律子氏の同著「解説」も参考になります。ご一読ください。

泉州と李贄(りし) 陳舜臣『中国歴史の旅』の記述も加えて

《泉州という町 陳舜臣『中国歴史の旅』の記述から》

福建省の泉州という町、並びに李贄(りし 字卓吾 1527-1602) について、以下、陳舜臣『中国歴史の旅下』(1993年 毎日新聞社)の記述からたどってみます。

「港湾といえば、福建に古い国際貿易港があったことを忘れてはなりません。それは泉州というまちです。泉州という地名から日本の堺を連想される人がいるかもしれませんが。むかし貿易港として栄えたことにかけては、両者に共通点があります。けれども福建の泉州は、日本の堺よりずっと古い貿易港でした。(中略)

東西交易が盛んであった唐代、泉州はすでに海外にひらかれた港でした。(中略)

マルコ・ポーロの『東方見聞録』に、ザイトンという大貿易港の話が出ていますが、それが泉州であったことも桑原博士が論定しました。」

《李贄(字卓吾)について 続けて同著の記述から》

「明代にこの地方から李卓吾(りたくご)という、当時の常識から見れば異端の思想家があらわれました。儒教のモラルを徹底的に批判するような思想体系をその著書にくりひろげたのです。そのような著書は為政者に焼かれるだろうと予想して、題名を『焚書』としたほどの変り者です。最後には獄死するのですが、中国の思想史を語る時、忘れてはならない人物とされています。この李卓吾は回教徒の家に生まれました。彼が外国人(アラビア人かペルシャ人)の子孫であるか、漢族の回教徒の家に生まれたのであるか、諸説紛々としているようです。けれども、泉州という開放的な国



の思想史を語る時、忘れてはならない人物とされています。この李卓吾は回教徒の家に生まれました。彼が外国人(アラビア人かペルシャ人)の子孫であるか、漢族の回教徒の家に生まれたのであるか、諸説紛々としているようです。けれども、泉州という開放的な国

際港の風土が、彼のような特異な思想家を生んだのはたしかでしょう。」



イスラム教寺院、清浄寺 泉州市内 (橘撮影)

《陳さんが、書中、度々言及した李卓吾》

『中国傑物伝』16話のうち、第四話(張良)、第八話(張説)、第九話(馮道)、第十話(王安石)、第十二話(劉基)の5つの話に顔を出す李卓吾について記述したいと思います。

李卓吾には、左の段、陳舜臣さんの『中国歴史の旅』記述中にある『焚書』の他、歴史人物評論集『蔵書』がよく知られています。吉田松陰は、獄中、李卓吾の『焚書』や『蔵書』を「泣いて之を抄(うつ)す」と門人たちへの書信に記しています。

陳さんも、李卓吾に思い入れがおりのようなのです。「傑物」の一人に入れてもよかったのではと思うくらいです。

陳さんは、『中国傑物伝』の書中、『蔵書』の記述を5度、引用しています。下にあげます。

人 物	蔵書からの引用箇所
第 4 話 張 良	范蠡は越王句踐の猜疑をおそれて出奔して命を全うしたが、陶朱公として名利の場にあくせくして死に至った。それにくらべると、張良の「知謀」は、はるかにまさっているといわねばならない。
第 8 話 張 説	(則天武后) — 試みに今古の王を觀るに、人を知ること武氏に如く者有る乎。亦た専ら人才を愛養するを以て心となし、民を安んずるを念となすこと武氏に如く者有る乎。
第 9 話 馮 道	孟子曰く、社稷を重しと為し、君を輕しと為す、と。信に斯言なり。[馮]道、之を知れり。社は民を安んずる所以なり。稷は民を養う所以なり。民、安養を得て、而る後に…(以下略)
第 10 話 王安石	明の李卓吾は王安石と司馬光をくらべて、司馬光の反新法論も杜撰であり、神宗の改革意欲をとどめる力もなかったので、「当にその過を両分すべし」と、どちらにも軍配をあげなかった。
第 12 話 劉 基	明末の思想家李卓吾は、劉基が漢の張良に及ばないという世人の評に「非なり」(それはちがう)と述べている。(中略)人品識見は、むしろ張良の上にある、と評価しているのだ。

福建省泉州、李贄(りし)故居訪問記

人力三輪車に乗って、李贄の故居へ行く。

泉州は古い都市であるが、特にこの辺りは古い家並みが続く。地図を見ていて、ほぼこの辺りかなと思っていると人力三輪車が停まった。運転手が「着いた」と言い、指を差す。よく見ると、間口一間ほどの門の端に小さく、「李贄故居」とある。でも、門は閉まっていて入れない。

どうしようと思っていると、運転手が「家の人が帰って来た」と言う。顔見知りなのだ。

門をくぐると小さな庭になっており、いっぱい洗濯物が干してある。お婆さんは、急いで洗濯物を片付け、故居の戸を開けてくれた。狭い部屋だ。この一部屋が資料の展示室になっている。

資料をもとに彼をスケッチすると次のようになる。

「李贄(りし 字卓吾)は二十六歳で舉人となり役人生活に入る。五十四歳の時、雲南省姚安の府知事を最後に引退。湖北省の仏寺に隠遁生活をおくりながら、評論家、著述家として盛んに活動した。

李贄が生きた時代は、封建社会晩期の入口で、資本主義の萌芽の時代であった。彼は、超人的胆力と識見、進歩的思想を以て、容赦なく、道学家の虚偽奸佞を暴露すると共に、封建的倫理を猛烈に批判し

情も大いに関係している。

王陽明(1472~1528)は、南京兵部尚書、つまり陸軍大臣にまでのぼる。当時、中国の各地に、大規模な農民反乱が続発するが、次々にこれらを平定し軍略家、政治家として非常な名声をはくした。



左の写真は泉州郊外、イスラム教徒の墓の一角にある「伊斯兰教圣墓」です。この墓には、初唐の7世紀前半、布教に訪れたマホメットの弟子二人が葬られています。

このような彼の経歴から、国民党の「赤匪」討伐の先駆として、つまり、陽明は赤匪討伐の哲人として許せない人物ということになるのだ。

《『中国傑物伝』第十三話 鄭和の補足》

『中国傑物伝』に登場する16人の傑物個々についてはふれずにきましたが、話の都合上、鄭和についてだけ、ここでふれます。

上の聖墓の写真、入って奥、マホメットの弟子二人の石棺の背後に、「鄭和行香碑」という石碑があります(下の写真)。文面は、「永楽十五(1417)年鄭和於泉州回教先賢塚行香石刻」と題され、「欽差総兵太監鄭和前往西洋忽魯謨斯(ホルムズ)等国公幹永楽十五年五月十六日於此行香望靈聖庇佑鎮撫蒲和日記立」とあります。

鄭和は第五次遠征出航に先立ち、ここに来て香を焚き、航海の無事、マホメットの加護を祈った。この碑は鎮撫の蒲和日が立てたものである。

(このページの写真3枚は、いずれも編集委員橘が撮影)



た。その著書のため投獄され、獄中で自殺した。李贄の学説思想の後世に与えた影響はすこぶる大であり、彼は、歴史批判主義進歩思想家の第一位に位置付けられる」

現在の中華人民共和国において、李贄に対する評価はすこぶる高い。一方、陽明学の祖、王陽明に対する評価は完全に逆である。陽明の哲学が典型的な主観的観念論で、これこそ、共産主義の哲学、唯物論の敵だから、ということもあるが、次のような事

野嶋剛著『タイワニーズ 故郷喪失者の物語』

野嶋剛著『タイワニーズ 故郷喪失者の物語』（2018 小学館）は面白い本でした。

まず最初に、『タイワニーズ』終章「タイワニーズとは」のいくつかの文章を紹介します。著者の執筆意図をくみ取って下さい。◆取材対象の人選において留意したのは、「ファミリー」の要素である。本書で紹介する人々は必ずしも本人が来日を決定したわけではない。その背後には大きな歴史の流れに向き合うそれぞれの家族の決断があった。私は、その決断を背負って生きている人々に興味があった◆台湾をスルーする日本の知的コミュニティ。それは政界、官界、学界、マスコミ、知識人のすべてが加担した忘却と思考停止の行為であり、国をあげての「台湾サボタージュ」と呼ぶべき現象であった◆冷たい忘却の時代のなかで、誰が、日本と台湾の間をつないでできたのか。タイワニーズたちだ。彼らの存在なくして、日本と台湾の関係は今日のように深いものになっただろうか。

下に目次の抄録を添付していますのでご覧ください。（編集委員 橘雄三）



以下、『タイワニーズ』第五章「3度の祖国喪失 陳舜臣」から得た情報について紹介いたします。

《1. 取り上げられた2冊の本》

陳舜臣さんに『怒りの菩薩』というミステリーがあります。まず、『タイワニーズ』の記述です。

「陳舜臣には1962年に発表された『怒りの菩薩』という著書があり、はっきりと台湾における国民党の民衆弾圧に言及している。」

同書の解説で伴野朗氏は次のように述べています。「陳さんは、台湾を舞台にして、いくつかの小説を書いておられる。（中略）台湾の体臭がする点では、本書が一番であろう。また、故郷台湾に対する陳さんの熱情が全篇にほとばしり、歴史的背景とあいまって、物語に厚味を与えている」

もう一冊は本田善彦著『日・中・台 視えざる絆』です。陳さんの妹・妙齡さんについて、『陳舜臣中国ライブラリー30 年譜』に「1950年代に祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、北京放送で放送記者をしていた」とあります。この点について、上掲書は更に詳しい情報を与えてくれます。

《2. 陳舜臣さんの国籍》

陳舜臣さんの国籍について、『タイワニーズ』では次のように記述されています。

「陳舜臣は、1945年を境に、日本国民から中華民国国民になった。その身分は、台湾に渡って戸籍上も確かなものになり、日本に戻っても国籍は中華民国のままであった。1973年に中華人民共和国の国籍を取得したが、台湾の人々が、中華人民共和国の国籍を取得したことで、中華民国籍を喪失することは法理上できない。なぜなら、中華民国は中華人民共和国を正統政府として承認していないからだ。そこで、陳舜臣は、外形上ではあるが、中華人民共和国と中

華民国の二重国籍状態になった。その後、天安門事件で中華人民共和国籍を放棄したのは間違いない。日本国籍を取得する際に、中華人民共和国の国籍喪失の証明が求められるからだ。しかし、日本の入管当局も、中華民国籍の喪失の証明までは求めることはなかった。なぜなら、日本は中華民国を外交承認していないので、陳舜臣の中華民国籍を問題視することはなかったと推測できる。陳舜臣が中華人民共和国籍を放棄したあと、日本と中華民国の二重国籍状態になり、そのことは亡くなるまで続いた。」

《3. 「日本は台湾を二度も捨てた」》

『タイワニーズ』の帯の「日本は台湾を二度も捨てた」を見て、司馬遼太郎『街道をゆく 台湾紀行』『千金の小姐』で、甲子園で名を馳せた嘉義農林学校の名選手・上松耕一氏のご夫人が司馬さんに、「日本はなぜ台湾をお捨てになったのですか」と問うくだりを思い出しました。

第一章	政治を動かす異邦人たち
	蓮舫はどこからやってきたのか
	日本、台湾、中国を手玉にとる「密使」の一族
	辜寬敏&リチャード・クー
第二章	台湾で生まれ、日本語で書く
	「江湖」の作家・東山彰良と王家三代漂流記
	おかっぱの喧嘩上等娘、排除と同化に抗する 温又柔
第三章	芸の道に羽ばたく
	究極の優等生への宿題 ジュディ・オング
	客家の血をひく喜び 余貴美子
第四章	日本の食を変革する
	「551蓬萊」創業者が日本にみた桃源郷 羅邦強
	カップヌードルの謎を追って 安藤百福
第五章	帝国を背負い、戦後を生きる
	3度の祖国喪失 陳舜臣
	column◆2・28事件と白色テロの傷痕
	国民党のお尋ね者が「金儲けの神様」になるまで 邱永漢
終章	タイワニーズとは